

〈原著論文〉

明治期幼稚園唱歌教育における唱歌教材に関する研究

—— 教材の形態的側面の検討を中心に ——

安田女子大学非常勤講師 三村 真弓

キーワード：幼稚園唱歌教育 明治時代 唱歌教材 形態的分析 音域・音程・音価

〔要旨〕

本論文の目的は、現代の幼稚園教育思想の原点ともいえる明治時代に焦点をあて、幼稚園教育思想の推移と共に変化していった唱歌教材の特徴を明らかにすることである。そのため、明治時代の幼稚園教育思想及び幼稚園における唱歌教育論の変遷を追うと共に、唱歌教材の音域・音程・音価の分析調査から算出された統計量をもとに年代順に比較考察を行い、唱歌教材の形態的側面からその変遷を検討した。その結果、幼稚園教育思想が次第に幼児の視点に立ったものへとなるにつれ、大人によって望ましいとされる唱歌教材が、幼児の能力や特性に適合した唱歌教材へと変化していったことが明確となった。

しかし一方では、明治中期以降独自の発展を遂げたキリスト教主義幼稚園が出版した唱歌教材は特異な性格を有していたことも明らかとなり、その背景にある唱歌教育観の違いが浮き彫りになった。

I. はじめに

明治9年、東京女子師範学校附属幼稚園が開設されて以来、我が国の幼稚園教育は、様々な幼稚園教育論を展開しながら発展していった。草創期の幼稚園教育はフレーベルの恩物を中心とした形式主義的な保育であったが、中期以降は次第に幼児中心の幼稚園教育論が唱えられるようになり、後期になるとより自由な幼稚園教育が目指されるようになる¹⁾。

明治時代の幼稚園における唱歌教育も、幼稚園教育の変遷に伴い変化していった。その顕著なものが唱歌教材である。唱歌教材は、発展していく幼稚園教育論に影響された幼稚園現場の要求によって、急激な変化を見せていく。しかしその中で、独自の発展を遂げたキリスト教主義幼稚園の唱歌教材は、キリスト教主義以外の幼稚園の唱歌教材とは明らかに異なった特徴を備えていた²⁾。これは、それぞれの幼稚園の背後にある幼稚園教育思想の違いによるものであると考えられる。

そこで本論文では、まず幼稚園教育思想及び唱歌教育論の歴史の変遷を追ひ、さらに唱歌教材の形態的側面を調査しそれぞれの唱歌集の特徴を明確にする。これによって、唱歌教育論がどのように唱歌教材に生かされたかを明らかにしたい。

II. 研究の方法

本研究者は、「明治時代の幼稚園唱歌教育に関する研究(2)」³⁾において、唱歌教材の歌詞内容の分析を行い、教材の意味的な側面からのアプローチを試みた。また、「明治期幼稚園における唱歌教育に関する研究」⁴⁾にて、唱歌教材の形態的側面からのアプローチとして、音域・音程・音価⁵⁾を調査し、統計量を算出した。本論文ではこの統計量をもとに年代順に比較考察を行う。唱歌教材について、①音域の調査により、幼児の声域に整合しているかどうか、②音程の調査により、幼児が歌唱しやすいものかどうか、③音価の調査により、幼児の心情にふさわしい躍動感があるかどうか、及び歌唱した際歌詞が実際の話言葉のリズムに近いかどうか、を検討する。これにより、明治時代の幼稚園唱歌教育がどの程度幼児の実態を把握していたのかを判断し、及び幼稚園教育思想が唱歌教材作成に及ぼした影響を判断する。

表1. 明治時代の幼稚園用唱歌集

明治前期	『保育唱歌』（明治10～13年）
	『幼稚園唱歌集』（文部省音楽取調掛編纂，明治20年）
	『幼稚唱歌集』（真鍋定造編輯，明治20年）
明治中期	『明治唱歌 幼稚の曲』第一集・第二集（大和田建樹・奥好義編，明治21～22年）
	『幼稚園唱歌』（エー・エル・ハウ撰，明治25年）
	『保育 遊戯唱歌集』（白井規矩郎編輯，明治26年）
	『クリスマス唱歌』（エー・エル・ハウ撰，明治27年）*
	『幼稚園唱歌續編』（エー・エル・ハウ撰，明治29年）
	『新編 遊戯と唱歌』（中村秋香作歌・白井規矩郎編纂，明治30年）
	『幼稚園唱歌』（共益商社編，明治34年）
明治後期	『日本遊戯唱歌』初編～第七編（鈴木米次郎編，明治34～36年）
	『幼稚唱歌』上巻・下巻（吉田恒三，明治36年）
	『育兒唱歌』春の巻・夏の巻・秋の巻（渡邊森藏編，明治36～37年）
	『唱歌 幼稚園』（目賀田萬世吉，明治44年）
	『教育 幼稚唱歌集』（園山民平，明治44年）
	『京阪神幼稚園遊嬉』（神戸私立頌榮幼稚園保姆傳習所編，明治45年）*

調査対象とする唱歌集は、『唱歌教材目録（明治編）』⁶⁾、及び『唱歌索引（明治編）』に掲載されている「昭和55年度版追録」⁷⁾に記載されている唱歌集のうち、題名、緒言或いは歌詞によって幼稚園に関連する唱歌集であることが明白なものすべてを網羅した。さらに、これ以外に入手できた唱歌集2点（*印）も調査に加えた（表1参照）。なお、本研究では、唱歌教材の形態的側面を調査するため、五線譜或いは数字譜のない唱歌集は対象外としている。

本論文における時代区分は、東京女子師範学校附属幼稚園が開設された明治9年から幼稚園での唱歌教材として後のさまざまな唱歌集の原点となった文部省編纂の『幼稚園唱歌集』が出版された

明治20年までを明治前期とし、明治21年から31年までを中期、「幼稚園保育及設備規程」が制定された明治32年から45年までを後期とした。この時代区分に従い、それぞれの時代の幼稚園教育の動向と、幼稚園教育思想及び唱歌教育論の推移を概観すると共に、唱歌教材の分析に基づいた各唱歌集の変遷を検討していく。

III. 明治時代の幼稚園教育思想の変遷と唱歌教育論の推移

草創期の幼稚園は、欧米のフレーベル式幼稚園を模した、恩物中心の形式主義的保育であった。明治前期終わり頃になると、実際の幼児の姿が観察されるようになり、形に捕らわれた恩物の教授の仕方に疑問が持たれるようになった(史料9, 10)。明治前期終わりから中期にかけては、フレーベルの幼児教育の真髄を明らかにし、恩物の本来有している教育的意義を見いだそうとする意見が出るようになる(史料14, 15)。明治後期になると、自由遊びの必要性や自己活動の重要性が指摘され、恩物の自由な使用を認める考えが起こってきた(史料25, 27)。また幼稚園教育は、小学校教育と根本的に違うことが認識され、幼児の視点に立った保育の必要性が説かれるようになった(史料25, 27)。

一方、唱歌教育の目的は、草創期には主に身体的・情緒的な効果にあるとされていた(史料3, p.27)。明治前期後半以降は、これに“徳性の涵養”という道德面での教育的効果が加わる(史料6, 緒言)。これは、中央集権国家の確立を目指していた政府の教育政策の現れであり、これによって、唱歌教育は幼稚園教育の中で確固たる地位を得たといえよう。

唱歌教授法は、①実物或いは絵画を用いた直観教授法、②歌詞の意味を幼児に説明する際の問答法、③範唱法、④唱歌に適宜な遊戯を付加すること、に要約される(史料2, pp.25~28, 史料10, p.59)。①~③は、ペスタロッチ主義的唱歌教授法の影響であり、④はフレーベルの幼稚園教育思想の影響であった。この4つの教授法に加え、中期・後期には、⑤幼児は飽きやすいので唱歌は短時間行う、⑥幼児は歌い方を度々注意されると萎縮する、⑦幼児が興味を持たないような発声練習や音階練習は行うべきでない、などの幼児の視点に立った教授法を用いるべきだという見解が見られるようになった(史料25, pp.75~78, 史料26, pp.93~97, 史料27, pp.151~152)。

では、唱歌教材論はどのような展開を見せたのであろうか。草創期幼稚園における唱歌教材論は、①歌詞がわかりやすいもの、②旋律の抑揚が簡易なもの、③拍子は4拍子のもの、④曲節が活発なもの、と要約される(史料3.)。しかし、草創期幼稚園の唯一の唱歌集である『保育唱歌』は、難しい歌詞を用い、ゆったりした曲調であったため、決してこの論に則したものではなかった。明治前期後半に入り、『幼稚園唱歌集』の緒言では、テンポのゆっくりしたものや、音域・音程の広いものを避けるべきだとしている。

明治中期には、言葉と旋律の一体化の必要性についての記述(史料11, 第二集序文)が見られ、また歌詞についても、古雅難解でないものが望ましい(史料14, p.65)とされたが、格調の高さを求める姿勢に変化はなかった。

明治後期には、幼児を観察した結果得られた所見をもとに、幼児の発達段階の特徴を捉えた幼児中心の教育論が展開された。これに基づき、当時の唱歌論の中で最も変化し、具体性を持つようになったのが唱歌教材論である。幼稚園で教える唱歌について必要な条件は幼児の興味を惹起させるものであるとし、決して大人が望ましいとするものであってはならないとした(史料25, p.68)。後期の数々の幼児教育書や幼稚園用唱歌集の緒言などに見られる唱歌教材論のうち、形態的側面に関しては、次のように要約される(史料23, 上巻緒言, 史料25, pp.73~74, 史料26, p.93)。^①大人の感情に適した旋律を幼児に用いるのはよくない、^②音楽的価値がどこにあるかを察して曲及び歌詞を選択すること、^③曲は平易で模倣しやすいこと、^④音域は狭いものが望ましく、 $d^1 \sim d^2$ を普通とする、^⑤音程が突然に変化しないこと、^⑥同様な旋律の繰り返しが必要である、^⑦半音は少ない方がよい、^⑧拍子は4分の4拍子や4分の2拍子のものが一番良い、^⑨勇壮活発で歩調に合うものは幼児の活動性に適しており、悲哀な調はあまり必要でない。これらの後期の唱歌教材論は、当時の幼稚園教育思想の影響を受け、幼児の視点に立ったものであるといえる。

IV. 形態的側面から見た幼稚園用唱歌教材の変遷

本章では、以前に調査した⁸⁾明治時代の幼稚園用唱歌教材の音域・音程・音価の統計量をもとに、年代順の比較考察を試みる。

1. 音域

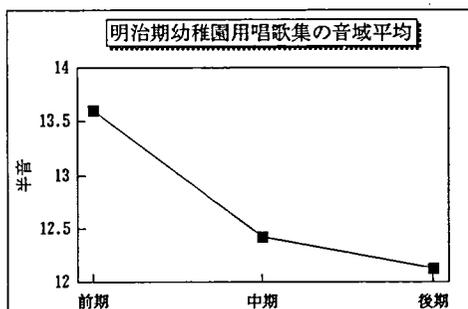


図1. 音域平均の推移

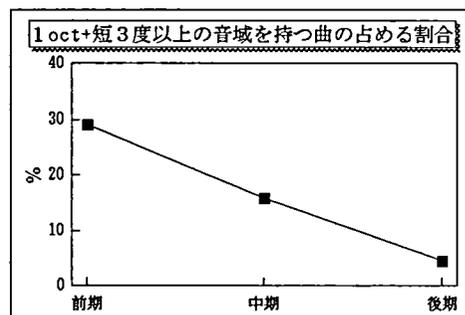


図2. 1 oct + 短3度以上の音域を持つ曲の占める割合

音域に関しては、図1に見られるように、前期の唱歌集全体の平均が13.60半音、中期の平均が12.43半音、後期の平均が12.13半音と徐々に狭くなっている。後期の唱歌集の平均を見ると、ほぼ幼児の半数が歌える声域内におさまっている。特に、幼児の声域を越えていると思われる1オクターブ+短3度(15半音)以上の音域を持つ曲の占める割合は、前期が29.20%、中期が15.89%、後期が4.62%と大幅に減少していることがわかる(図2参照)。

2. 音程

音程に関しては、前期の唱歌集全体の平均が2.13半音、中期の平均が2.20半音、後期の平均が2.06半音となっている（図3参照）。中期の平均が前期の平均よりも数値がやや高いのは、キリスト教主義幼稚園出版の3点の唱歌集の全てを占める外国曲がかなり音楽的に複雑であり、広い音程が多いためと考えられる。同様の理由で、図4の増4・減5度音程も、前期が0.12%，中期が0.35%，後期が0.05%となっており、中期の方が若干高くなっている。このキリスト教主義幼稚園の唱歌集を出版したハウは、従来の日本の幼稚園用唱歌集が音楽的に単純で幼稚なものであるとしており⁹⁾、彼女は歌いやすい簡単な唱歌よりもより芸術的なものを目指していたと思われる。

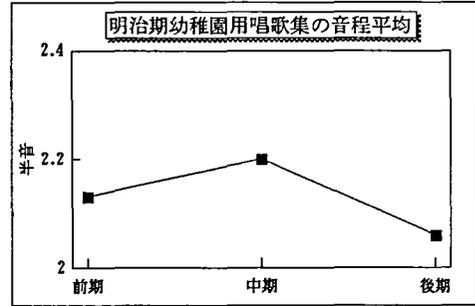


図3. 音程平均の推移

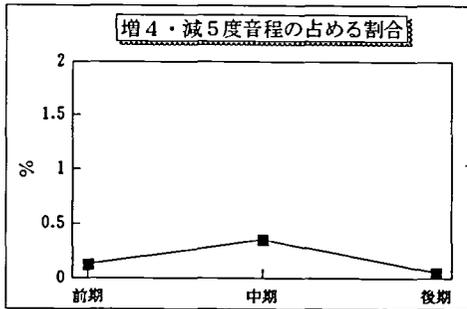


図4. 増4・減5度音程の占める割合

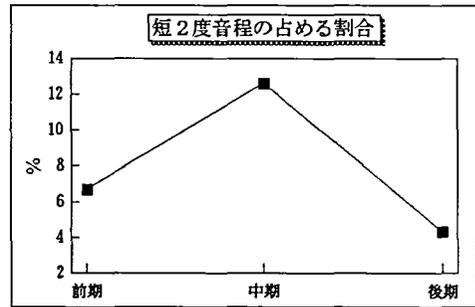


図5. 短2度音程の占める割合

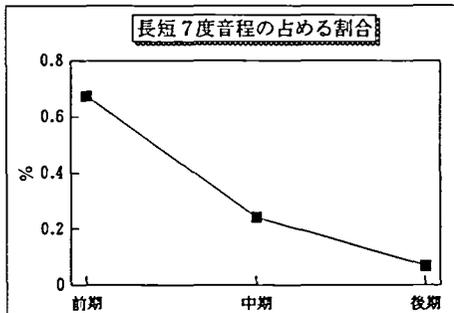


図6. 長・短7度音程の占める割合

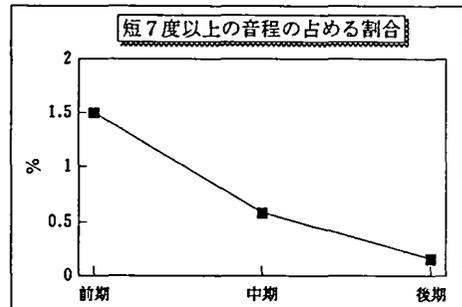


図7. 短7度以上の音程の占める割合

一方、短2度音程（半音）は、前期が6.64%、中期が12.57%、後期が4.28%となっている（図5参照）。前期の数値が中期よりも低いのは、『保育唱歌』に短2度音程が一切使用されていないためである。また、後期の数値が低いのは、「半音は少ない方が歌いやすい」という後期の唱歌教材論の現れであるといえる。さらに、歌いにくい長・短7度音程は、前期が0.68%、中期が0.24%、後期が0.07%と着実に減っている（図6参照）。また短7度（10半音）以上の音程の占める割合は、前期が1.51%、中期が0.58%、後期が0.15%と、次第に広い跳躍進行が少なくなっているのがわかる（図7参照）。

3. 音価

音価に関しては、前期の唱歌集全体の平均が1.13、中期が0.88、後期が0.68と急激に短くなっている（図8参照）。また、図9に見られるように、前期では音価が1よりも少ない文字は28.35%、1よりも多い文字は18.72%であり、中期では音価が1よりも少ない文字は45.78%、1よりも多い文字は12.03%である。後期では音価が1よりも少ない文字は72.04%、1よりも多い文字は6.29%となり、歌詞が次第に言葉のリズムに近くなっているのがわかる。このことは、言文一致唱歌の普及を何よりも雄弁に語っていると思われる。

さらに、音価が短くなったことにより、よりリズムカルで、躍動感に富んでいる曲が増えたといえる。明治時代の幼稚園における唱歌遊戯の変遷との関連が興味深い。

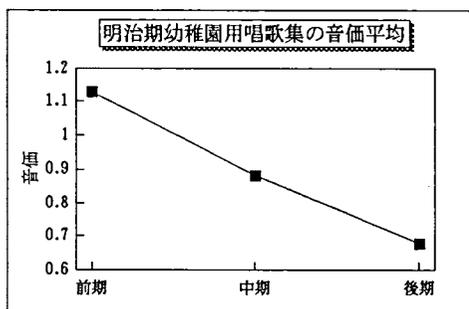


図8. 音価平均の推移

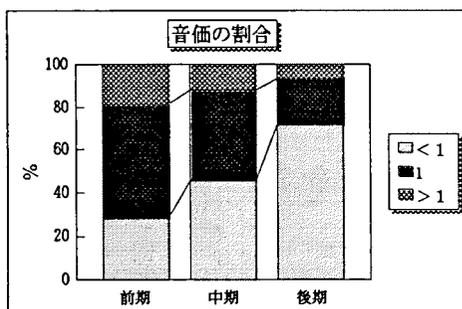


図9. 音価の割合

4. 音階の種類

唱歌教材の旋律を構成している音すなわち音階は、年代を追って、或いは外国曲か日本人の作曲した曲かによって異なってくる。明治前期の『保育唱歌』は全て日本旋法で作られているが、それ以降の唱歌集では日本旋法の曲は非常に少なくなる。前期及び中期の唱歌集は、外国曲が多いため、いわゆる四七抜き長音階でできた曲の占める割合はそれほど多くない。特に、キリスト教主義幼稚園出版の3つの唱歌集は全て外国曲であり、四七抜きは1曲もなく、全音階で作られているものが圧倒的に多い。逆に日本人の作曲による2つの唱歌集では、四七抜き、七抜き、四抜きが多数を占める。後期の唱歌集では、四七抜きの曲は総じて多く、旋律が単純になってきたことがわかる（図10参照）。

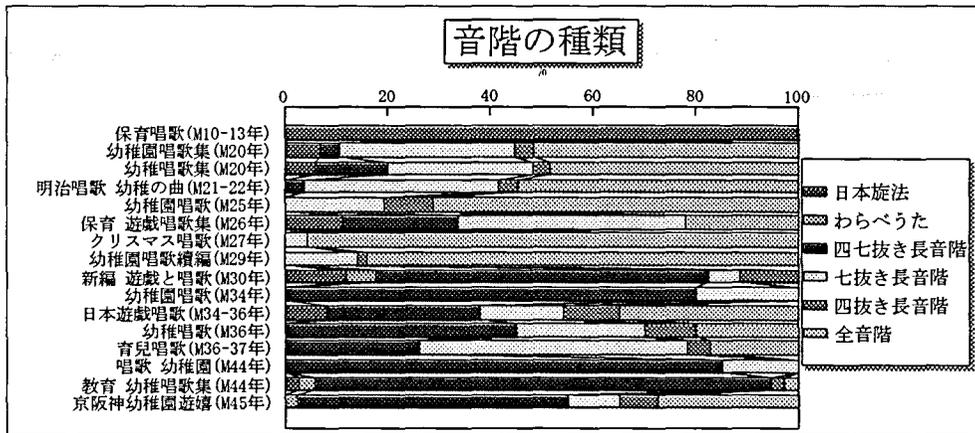


図10. 音階の種類

5. 考察

草創期幼稚園で始められた唱歌教育は、雅楽調の旋律に難解な文語体の歌詞が付けられた唱歌教材を使用しており、決して幼児の声域や心情を考慮したものではなかった。

明治中期になって、次第に幼児の現実の姿に目が向けられるようになると、徐々にではあるが、幼児の声域や歌いやすさに配慮し、躍動感に富んだ曲が増えてくる。それは、依然として用いられた外国の曲に混じって、日本人の手による曲がその数を増し、言葉と旋律の関係も考慮されるようになったことが要因と思われる。

明治後期には、幼稚園教育論や唱歌教育論が盛んになり、日本人の作曲技法の向上と共に、幼稚園の唱歌教材も、音域・音程・音価に関して、さらに幼児の歌いやすさや心情に配慮したものとなってきた。

明治時代の幼稚園教育思想は、形式的で格調の高さを重んじた草創期から、明治前期後半以降、次第に幼児中心の考え方に変わっていった。それと共に、観察に基づいた幼児の発達段階が明らかにされ、明治後期になると、唱歌教育論も幼児の視点に立って展開されるようになる。その結果、従来大人にとって望ましいとされた唱歌教材が、幼児にとって望ましい唱歌教材、すなわち幼児の能力や特性に適合した唱歌教材へと変貌を遂げていった。

しかし一方では、明治中期以降独自の発展をしたキリスト教主義幼稚園が出版した唱歌集の特徴から明らかになったように、単純で歌いやすい唱歌教材よりも、より音楽的・芸術的な唱歌教材を幼児に与えるべきだという唱歌教育観も存在した。

V. 終わりに

本論文では、明治期の幼稚園教育思想の変遷を追うと共に、幼稚園における唱歌教育論の推移を唱歌教育の目的・教授法・唱歌教材論を中心に明らかにした。その結果、唱歌教育の目的には政府

の教育政策の影響が現れ、教授法と唱歌教材論には幼稚園教育思想との関連が認められた。

また、唱歌教材の形態的側面すなわち音域・音程・音価を分析し、考察した結果、幼稚園教育思想及び唱歌教育論の影響が明確になった。幼稚園教育思想が、次第に幼児中心の保育を目指して行くにつれて、唱歌教材の形態的側面も、幼児が歌いやすいもの、幼児の心情に適したものに变化していった。しかし一方では、キリスト教主義幼稚園出版の唱歌集に見られたように、背景にある幼稚園教育思想の違いによって、異なった特徴を有する唱歌教材も存在した。

以上のことから、明治時代の幼稚園唱歌教育において、幼稚園教育思想及び唱歌教育観の変遷の影響を最も如実に顕したのが唱歌教材であったといえる。

今後は、各幼稚園における唱歌教育観の違い、及び唱歌教育観の年代的な推移を追っていきたいと考えている。

[註及び引用・参考文献]

- 1) 史料 1, 2, 3, 5, 8, 9, 10, 14, 25, 26, 27
- 2) 拙稿「明治時代の幼稚園唱歌教育に関する研究(2)－唱歌教材の歌詞内容の分析を中心として－」『教育学研究紀要』第二部, 第40巻, 中国四国教育学会, 1994年, pp.301～306
拙稿「明治期幼稚園における唱歌教育に関する研究－唱歌教材の分析を中心として－」広島大学大学院教育学研究科修士論文, 1995年
- 3) 同前書 2)
- 4) 同前書 2)
- 5) 音価は、本来音符や休符で表される個々の音の持つ時間的な相対値のことをいうが、本論文では、1文字に付されている音符の合計した長さの意味で使用している。音価は、拍子記号に基づいた1拍を1とし、歌詞の1文字毎に計算した。
- 6) 『唱歌教材目録(明治編)』国立音楽大学音楽研究所年報第4集, 1980年
- 7) 『唱歌索引(明治編) 1－曲名・歌詞索引』国立音楽大学音楽研究所年報第5集, 1984年, pp.615～629, 「昭和55年度版追録」
- 8) 前掲書 2) 「明治期幼稚園における唱歌教育に関する研究」
- 9) 高野勝夫『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄短期大学, 昭和48年, p.33

[史料]

1. 文部省『幼稚園』巻之上(明治9年)・巻之中(明治9年)・巻之下(明治11年)
2. 東京女子師範学校『幼稚園記』明治9年, (岡田正章監修『明治保育文献集』第二巻, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
3. 豊田英雄「保育の栞」(手書き)明治12年, (文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社, 昭和54年の巻末資料に全文記載)
4. 長谷川協輔・高田義甫同輯『慈母教草』書籍賣弘所, 刊年不明

5. 飯島半十郎『幼稚園初歩』青海堂, 明治18年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第四卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
6. 文部省音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』東京音楽學校, 明治20年
7. 眞鍋定造編『幼稚唱歌集』普通社, 明治20年
8. 榎本常・平松三木枝編輯『幼兒 保育の手引』細謹舎, 明治20年(岡田正章監修『明治 保育文獻集』第六卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
9. 林吾一編纂『幼稚保育編』金港堂, 明治20年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第三卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
10. 寺井與三郎『幼稚園保育術』大阪教幼書房, 明治20年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第三卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
11. 大和田建樹作詞, 奥好義撰曲『明治唱歌 幼稚の曲』第一集(明治21年)・第二集(明治22年) 中央堂
12. 大和田建樹・松山高吉校閲, エー・エル・ハウ撰『幼稚園唱歌』明治25年
13. 白井規矩郎編『保育 遊戯唱歌集』敬文堂, 明治26年
14. 中村五六『幼稚園摘葉』普及舎, 明治26年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第八卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
15. エー・エル・ハウ『保育學初歩』頌榮幼稚園, 明治26年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第五卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
16. エー・エル・ハウ撰『クリスマス唱歌』福音社, 明治27年
17. エー・エル・ハウ撰, 大賀壽吉編輯『幼稚園唱歌續編』福音社, 明治29年
18. 白井規矩郎編『遊戯と唱歌』同文社, 明治30年
19. フレーベル著, エー・エル・ハウ訳『母の遊戯及育兒歌』頌榮幼稚園, 明治30年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第六卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
20. 共益商社編『幼稚園唱歌』共益商社, 明治34年
21. 鈴木米次郎編『日本遊戯唱歌』初編(明治34年)・第貳編(明治34年)・第三編(明治34年)・第四編(明治34年)・第五編(明治34年)・第六編(明治34年)・第七編(明治36年), 十字屋
22. 旗野十一郎作詞, 渡邊森藏作曲『育兒唱歌』春の巻(明治36年)・夏の巻(明治36年)・秋の巻(明治37年), 同文館樂器校具店
23. 吉田恒三『幼稚唱歌』上巻・下巻, 村上書店, 明治36年
24. エー・エル・ハウ『保育法講義録』私立岡山縣教育會, 明治36年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第九卷, 昭和52年に復刻版として記載)
25. 東基吉『幼稚園保育法』目黒書店, 明治37年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第七卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)
26. 中村五六『保育法』國民教育社, 明治39年(岡田正章監修『明治保育文獻集』第八卷, 日本らいぶらり, 昭和52年に復刻版として記載)

27. 中村五六・和田實【幼児教育法】フレーベル會，明治41年，(岡田正章監修【明治保育文献集】第九卷，日本らいぶらり，昭和52年に復刻版として記載)
28. 目賀田萬世吉【唱歌 幼稚園】大阪開成館，明治44年
29. 園山民平編【教育 幼稚唱歌集】大阪開成館，明治44年
30. 神戸私立頌榮幼稚園保姆傳習所編【京阪神幼稚園遊嬉】明治45年
31. 芝祐康編【保育並ニ遊戯唱歌 現代五線譜】(手書き) 昭和33年，(『音楽基礎研究文献集』第15卷，大空社，1991年に復刻版として記載)

(改稿受理 1995年12月13日)

[Abstract]

Study on the materials for singing education in the kindergarten in the Meiji era

— Mainly through the investigation of the morphological
point of view of singing materials —

Mayumi Mimura

The purpose of this paper is to characterize the changes in materials for singing education, in accordance with the development of the thoughts of kindergarten education, focusing on the Meiji era, when most of the modern thoughts of kindergarten education began.

To achieve this purpose, first, the development of the thoughts of kindergarten education is described; and similar discussion on singing education, is made, then make chronological comparison, based on an analysis of the range of note, interval and time value of the materials, and this is followed by an analysis of the process of the transition in the structure and composition of singing materials.

Based on data, the change in the materials, from one suitable to adults, to materials suitable to children's abilities and characteristics is observed, moreover there is an observed shift in concern for the children themselves.

On the other hand, the peculiarity of the singing materials published for kindergartens under Christian administration which did own development since the middle of the Meiji era, is made clear. The materials reflect the Christian attitudes behind singing education.